



歌城歌集

雜追加

四



特別
~4
7350
4



特
八4
7350
4上



歌城歌集

雑歌

嵐

うきさきを拂ひそして久がけ舟のさらすそゆく嵐の舟
春まつや枝おこりぬ花もをしおと嵐よあろしそあけ
もみち葉のさやけ秋のまことあきわたり梅をふくつらしそ
野風
こけしものゆり甲の道は風おもてこのと小笠も吹やうれは

山や

○歌城歌集四

〇一



45 1150 (4)

はらりと山越越ゆる旅人のつとむらから守り給のうたを
不二山

夕附日入ぬる後を色きるて暮あふゆる暮のふしは袖
のしやうのふむけおきてもゆへに根はふもとふりよかたらうけり
とねしぬ山をうらまきしはるはるさそあきのふしは袖
ふしの袖も天地のけふつまひて暮あふのうらふ有うそそるる

川

舟よらんあうらうらぬの稀くおききるてぬる淀の川にうた
海



つらつらせせの夕日おぼろげに波お灘おたかへるつらつら
海を眺むる
沖はかみさへふらふとてし船のやうけをさすかかたうらそるふ
わこのふ入目をあふはのふしおととえぬ沖のともふぬ
和田のふらふと波とのかきうらほのそえそとてつらつら
とたつ風今やうらうらむとつらふ船のふらふとつらつら
海を眺むる
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつら
つらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつらとつらつら

湖

山かけや初は海にまはれゆく入目をかふるまは浦風
湖上眺む

又わらわをゆくあこぎらうあまのやまのちは乃のま
水に眺む

又ませ河山本遠らゆらまはるまきまをいしゆ方乃そら
名取山

与一山をくちかきぬて春らんやさちをいふのまは不二の招
名取山

月くらきまめのうみお層あまて星うけま一糸乃後う勢

名所松

うーびてねもあまのゆりごとねとらやま人のいふらん

松歴年

山のもねまふきひえてあひのあまらふちのねまあ代のともね

山家

かほゆほ素の枝たきつらうて替銅六となく杖の山里

まのうきまあつまといつてまらうふあとかうまき山の奥いん

らうーらふ方のまうとまのうらふかたらあーとと位山まうあ

山家守

しらしられきはしむゆりまを 水塔のふふ 帰るらまを

山家美

まよゆ先却のかへいしむらあうた世のまゆ かくれしむら

山家き

山さとのきとれ 杉生ふかくろて 日れまらま 銭あつ木 兎

雀

親きふらまえて 餅くまけちのまをらうら ぬあむいふ

鳥

朝ふけそ 舟の散級らふ村 鳥さのけらういもさわう けらや
鳴る 木の月忘つのかまこ ことあより 敷ららとねて かく 鳥うが

鶴

風さそそと 鐘ゆるはふの日ふらう けねかすむい ちね 松さ

故都

まかけぬのあるとらうも 暮やうらふらた ちやこのけらとけ 礎

古寺

ゆいとの 中まうけ 吹後徳の 林馬寺 けらやあつるも ぬさしらん

幣

沖はふれせとこまあふれ絶あましやぬきとる神よ風風のふく

漁舟

明ぬるらうまのゆねよとせはたのありのまの末のふじい

宮鐘雜

らとあくまけいんをそあむらうのまの鐘た入相のあゑ

管絃

月うけのすみゆるまふ琴の音のたひあまうるをたねは

小春宮をみて筆寫人心とくを

かまつらる筆いあくのこをつらすこの海はあきふのせを

閑居水聲

おのせはこおとふたそとらうらふあふらぬ山のせは清き水

夕幽思

夕暮あけうらうた月のゆらねやんきかあひのらふそあらん

閑路夕

らくあえてぬととの里ふ宿かむ日らまらんよはくうの雲

旅初夕

一夜うかやうとえくぬくち海りらうらもねとくうら

ふるさやと夕日のきふうららて山ゆきく旅東路のそら

板こゆの はゆふは 鈴のまをしりきよふりひく夕られのやまの
旅ちうくと申日のかけふあらうしてまじふとわさるやまのうけと
まをそ山ゆふこえらまじ谷信ふ入おの種れおとまこゆふ
うまひやま夕あえちうと休くをあしゆとよりそまをわさる

旅天香

おつのまのあうけんあつかけらむいふまこゆのまの
ゆまららし山ゆとあうゆやまのねいさゆまひぬのららはすは

羅縉旅

しゆひねりまきまふくふはよの月まをねまふすくゆりつ

山旅

とまきそ山かけちとどのあまの白きおあよりひく谷信のら
ふあらる路やおととと一ろお旅人のまもまゆするまらけの水

朝旅

うほやちやけくね湯よまをこえておつとまむくゆままのち

いのま旅

よとらやのある提子らるる船おゆと却とゆねわこまけく

旅者

あむまふかり旅のまの枕ち力さやふらんまよふまのま

旅宿あり

つらりとまゝとちんむらにけるはくろ思ひやうもつらきあま

旅泊月

楫まららむむかけのさひしきふゆとくき秘のちや息しき

文化十年大坂小大番小のわるゆとくしめて

濃田の楫紙わきとて

この秋をまゝとゆみえしとさひしきをかけるはきせれたのちと

八月をしめ信濃五きをむゆ中ふやとりしむ

ちんちんちんねの床おしきゆる夜を枕とちるる谷川のこら

かゆてよると思ふおこえてはきまきまを旅宿の四方乃を

志那の玉依傍めて

宿からしむ柿葉の里しんえあうらむらむら道のほらけ

つらまかきしひのたむけとちとて

くさしひのしきまててはきさうらむらむら入方乃月

はるゆめて

旅ちんと朝とらしむはるゆふまあまらむらむらむら

るや

ふとあひ川ゆむしめてすみねむらむらむらむらむらむら

かき集るる花うらとふはらとをゆつらんす

君らるるのみまらけすよきふねの如くかき集る

うらふ花おもふも花の如くかき集る

花うらとふはらとをゆつらんす

久見正典主のむとようき集るをかき集るらん

ふらうらとふはらとをゆつらんす

もの如のいろまらけすらんかき集るらん

終る

今とせむらうと終るらんかき集るらん

終る

沖のうみはらまのいろやのくまふいりうらとふはらとをゆつらん

右寺のをふらとふはらとをゆつらん

終る

妹あつみおろけおと妹の羽乃きれき色のつらうらとをゆつらん

花の如くかき集るらん

うらとふはらとをゆつらん

義家朝臣

みらけくのつやはらとふはらとをゆつらん

名をその室おはらるるあり義家朝臣のまのふのそ
えみくくか

いゆ一人の室を治るる事ぬきと花のやまをハ控のころりれ
頼政

んをくよりまを山つりい吹くいせとんハせとらちの川を
梶原宗厚

ものぬの人命かけとのけうたふを名もつるる花んぬりうあ
北条泰時朝臣の二階堂入道と酒のみとるか
ふらみて民安かういせのまもはけぬけゆらんとそあらはく

小督局

世のさつはつらき山風もくろあうらまたくもさうらう、女師花が
白拍子舞

んあをらうそとらまう神返んくあかきとそくぬらうとく
んくくやうくやといてさうくもらうまらうあも名は社まをれ
水鏡小火をふちて船も焚とらうかろうか

牡丹城
馬も富永守緒のよまのそ

たえそゆいむさふくあや一ぬのさうてんをふにおかて

名こそはるかにあり義家朝臣のまゝの
ふみくさか

いゆへにのまを路をくまぬまの花のやまをば控のころりれ
頼政

んるるよりまを山つらうひせとんはせとらりの川を
梶原景時

ものめの人命かけをのぬくたよふをるもつまつ花をむらうか
北条春時朝臣の二階堂入道と酒のみとらか
ふらみて民安かう一世のまもはぬけけむらうとらはく

小督局

世のまはつらき山風もくわうらまたくもくうらく女師花が

白拍子舞

んあまらうそとらまふ神返るまかきまそくわらうとく
んくくやうくやをいそくうもらうまらうあもなほはまをれ

水鏡小大ふちて船も焚とらうか

れきつなみ鳴きほを志れあてたれたの舟来もみらうかけり

關羽乃像かき馬も多永守緒か

んはこくふれとと神といたあてかかひあふらうとら

杉の下に地を著る後のたてまつり

みねのちろねはけつしすねあふねもすめあすあまき
女柳の枝をいへてまつり

人ちろねもしあはるる黒髪は柳のいふもくへてまつり

わくき女の男かきしめまつり
かき

かきしめまつりあまきまつりかきまつり

西行法師の思はず報のき極やまつり

たうまつりまつりまつりまつり

福祿寿のかき

神そけおちやうりまつりまつり

布袋和尚の月おちまつり

有やうの中おちまつりまつり

鶴のかき

つらまつりまつりまつりまつり

はなまつりまつり

はのちまつりまつりまつり

すみのまつりまつり

うらしまのちふむうと志のひるむ人をいふをすみの江は流
富永ち結り古今集の撰者達かろ緒ふろく
かまてとこもくれと

まかりふら葉のちやとてちかえくるふ牛もけり
こ二平二段の面見か

よくそわおちとぬ花のやうらるるさしせんあすれつ
狐のよめ入るるばるきぬ松と

らる世やるらちのはあきゆまき一の流ある葉も今もあまら
とこうたのおくあのだた

ちららの流はさわかおとらてむう一のゆもあのか
申きのうかかぬお

お人のちれまもほくたこうあまへのをれ花のまあを
猫髻の画か

花ゆみらそわと句わもづらぬ方とらおかゆまねあ
こゝ鬼の髪髻かかちの現れたるまかろ紙巻よ

ら事紙あゆひとあてのさろ花のまえてもさぬけのこあ後
よせのあお君はあわはこ

なつとる君のよせれとこらあまの時ともあのとすけ

うらしまのちひむうと志のひどむ人をいふをすみの江は流
 留承を結びた今集の撰者達がうづうゆる
 かきそとてとくをいふ

まかふふら禁のちやとてとてちやとてふもたつた
 二平二波の面見よ

よ～とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 酒後 百あきちやてとてとてとてとてとてとてとて
 ちやとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 ちやとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

ちららの浪はきわまきおとらてむうのうけもあつとてか
 申きのうかむおふ

お人のちたきもはるるたこのあきらへのを花のるあを
 猫勝の画よ

花ゆみらそつと白くもつらぬ方をらおけはきけちあ
 ち鬼の髪舞ふかちの現れたうまにかる紙巻よ
 ち事流あゆむとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 よせのあおきちあちとてとてとてとてとてとてとてとて

なつとる春のよせはとてとてとてとてとてとてとてとてとて

あつたふゆりくる人の又お手八月のほろ
かたすすあるつきよーアま 長月おまを
ふとちやふとせきりけまをつとんーと
いふまを

君とんそ ちまふー君ふ月福すむかけきよんの結うせ
三月けさ道にふふかつふんか

あつたふとあるんのまさーんもまのの花をふてー又まん
富・水守結り七月おすお大番り大坂
ふゆえり

むーんーなまんのめをまつーき旅りきみりわつれのこうと

七月の末林川利義のまやあふ大妻ふのわよ

やけらるるあゆみとよの秋もよふまゆや神のあつた

朝はあま春う大番り大坂あゆ日

ちまふ今わまむーお家やうの君よあれてさあさびーを

はー人ふおへ長調りてつとんとてつと紙ふ

わつたをそーん心のうらあはひんふふさあーとうりき

増上寺の攝門う系よのわふ

けみさうふあかまーわくたひもふふわつたわつたやと

七月乃末つゝ春樹、難波ふかへし

とてつともおれやと山もはしとて思ひ、まよふやふれ

肥後が將のふかつたまふるのたまむけり

きぬふ郭ふのかとを菊池容赦ふかきてまゝに

はるきけたいや、みりやきつわつ君とてまゝおれ

源氏物語のまよふのまよふを

ちかゆひ、まよふのまよふ、まよふ、まよふ、まよふ

淡松侍はの稲山乃みらと紙ふおれ

うらよめとみらとを

いかり山まよふまよふまよふ、まよふのまよふ

まよふまよふのまよふ、まよふ、まよふ

まよふまよふのまよふ、まよふ、まよふ

まよふまよふのまよふ、まよふ、まよふ

岡本保孝は、経の七巻と八巻との考證を

かきて、まよふ、まよふ、まよふ、まよふ

まよふ、まよふ、まよふ、まよふ、まよふ

まよふ、まよふ、まよふ、まよふ、まよふ

小手、若原、懐古

うらねふとてかきし、ものふねこそきし、まことひるまきの風
二月のちろりし、せうふ乃ちりてし、うらねふとてかきし
うらねふと

君はし、むらねふとてかきし、まことひるまきの風
三月三日尾張ふま、津田の神社、經ふらふり
秋よみてまねと、同じ、五人のいひ、おとせられ、かきし、け
みわきのうらねふとてかきし、まことひるまきの風
おとせられ、かきし、け
おとせられ、かきし、け
おとせられ、かきし、け

すじ人のあがて、きき、まねと、同じ、五人のいひ、おとせられ、かきし、け
横中の画、おとせられ、かきし、け
梁のよ、おとせられ、かきし、け
畠山半操、おとせられ、かきし、け
てよう、おとせられ、かきし、け
中ふ、おとせられ、かきし、け
わさ、おとせられ、かきし、け
天保三年閏十一月、おとせられ、かきし、け
おとせられ、かきし、け

中野晋庵久しくそしるる事

杖の先の花は紫あけの雪とてふおとよめ人さしうらまはせよ

七月の末石川雅重りつていふはまはたしづのやま

大刀と志しむるゆきをまつてかくしやふとて

りてはまやのゆきとて夕まりのしらゆきしきりまのそと

年のくれお布縫正孝のあゆみつていふ大刀のそと

あゆみとて

物部のしゆらえのゆき花ことおままふ家のうらまはせよ

天保八年の暮二月十九日大坂おこしおこしゆき

あゆみとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

このときゆきとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

あゆみとていふはまはたしづのやま

つらやうとちた人の十二支とむゆて十二人ゆ
ころちて秋よりお給ひけるふ面を

ゆめとくかきつる昔はうとつらとくくの時とむゆてさつよ

尾張の玉勝川の竹もく葉匙小造とさふ

寺山え城う致をくれを月ふせつと

むう一君ちけ軍お猪川のろや牛とさふ切一名ちうらこ

葉匙とさつうらつううてくをしかんまをさつと

つらとくか孫行虎ふき付とてそ月よ

さつうせとまをとよかやからうと東の中ゆとえくとくれと

折揚柳

弱とらておおやまねも中のみととむお海のろやわつと

後軍行

つらとくあう世のそねとさつうらとさふもむら枯とせと吹

秋園然

む一乃まふあきの恨をぬきつらまね庭ハ中もむさひかゆつ

鏡相を

きくはちく山田ち春とかすをるを独とつのおさうらゆと

昔をり行

紙やして思ふもろくし一車とくたくりはきのみみち
きんた白馬篇

弓矢の月毛は豹のかけこしハまのよほまを踏ちりーつ

洞雀臺

言殿よあつて翠うよさた京あけのきこあをちやんこま

姫人恋服散

とろともと契ころー君うもまうこい福えたつ月をいふせむ

紅南曲

とろくすのひまふあつー池あのをはは富貴の末はそよくち

前溪殺

よーやこの乳をいふとも高あつらうる山狐つろつろせん

三洲殺

わうせここのいそ山からまのうねふあつらうるふく追はこる

渡易水殺

別つるんちあつらえちりあも川あときむと村うせそあく

揚衣曲

かろ衣うちもくの田まをあ女うはくーゆかろあまもあまあーを

西門行

百年をいついふ處か人のよふふこはこう極も行かぬ
新垣安樂歌行

遊女曲
高らるるをふさひえてそのくちらふかきは乾日さびたう

淮南子篇
たひや名の月たまゆすこわのくちを井のをふかきす神くね

傷物行
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

杞梁妻
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

上陽人
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

梅妃曲
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

子夜春歌
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

齋宮御禮
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

齋宮御禮
さよぬらひより立ちて大さふかきふこくくちらあけきり

らうきさくははのたまわねともあくみさきの時ふあゆく

櫻子

よーらうこくわつとるふもゆとーや福あやーふさくく外

まねくまのな

妹う門さては夜とーとと者と誰もふあゆとひんやそ

浦島子

まらーけーまの列のちかーまの田んやいつあわたこのま

お女

かみさぬまをわらうやへはねのーゆうれぬるあのかくうま

ようひくくゆかたの控ひきもあてうた枚のまあつりぬる

しやのかたよりあともあつてほぬの流なきはゆとよひぬる

弓はくま

鬼神とあつてゆ弓をゆりある人のしんまをはかりーまぬ

優婆塞

うんそくこのあたまふ山の流つぎふひくとすまきれいのまかみ

大刀

方の丈ねちとはうらてんく大刀のまねとねむさるまにん

大煩

かりふも軍のきみと名ふよとことらうあまやふのほふとの
らうかりの楯も甲もあらくくけつんもの八國のまうそ
まふのらもくたもかつちの鉢のまもあけよよ
稗史をぬむふよとらもてふ小説ももくひく
かいつんくくく一日金瓶梅をかかす
このは源氏物語をててあつひあをく
返す

かろ人のうつふ花のまとちうさくくといつる満とらう
纂聞韓非子をふかしてよませくはふ刑名の

ゆら人のらもくたもかきもやうたといはう送あやわら
明の聖教の劉心とかみふ快事をいひつて
らをかくらんといひいつるまふ數十ふあう
ぬらてあの人を評しける西相記のまゆのせなきなり
そのら王暁といふ人これふをいひていひつきけ
る事も物ふええを日ほあ降つきてさひ
き夜ふといとあひつて致ゆとよみちうあひ
といふらあもふつひつてけふ

門の戸をくくると何とぞんずしむ花をゆ友のささあちりさ
六月のてゝ日おやまをさくすくはるる流るるはあゆゆり
秋のやれまはるけくはねるうりかたえーさちのまんもさう
ありさくむさくおさくさく思ふさちのねまをのちをさくさ
誰とるさ瓜とさきのこさくさく人のさくまきとまくとまくと
たきもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さま酒あまひさくさくのみちる人のほおさくさくさくさく
みちのくねやまひさくさくさく人のあまこまひかまさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

縁ちるさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
をの面乃さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
はさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
太刀つさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さかいらふのさくさく博士あのを妻れさくさくさくさく
いつまもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
天地もかきさくさくさくさくさくさくさくさくさく
ゆる川ふるさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

かつおもひよまふいほけをいふてとれと
そのこいやくしきあまふ

おのこわかくしきとた園藤の志つて何の部

よりともさちけふふしつてよみえさるは後

よはれぬて心ほかきさるのこまかふは叙たこの

ちとちそのふれむいふくもかこくいふかき

まふちらとんたうをえ果さて自うあさる

うらふちりなをねやあしあさくこまをうり

あさるけり中阿舎信ふたりさういさうあゆい

まのつれやうとていふさあもあつた
ふいふいふうーのすらーあつるは後お
お定後伊赤保とてえーあてやーありり
うらひもやとねるふちさうほふいささ
おもさふふうらうき呵々大笑

は昨等うあーあ計いされてもあふいささあひさや
ささらむとあふちらる中あやうさういのかーあはる
又のらふ平田篤胤うり度務志出定笑語を

よみえたるふこのあめ二書ゆもとつきてあつて
 のほひいすうて古遠き心のまつてあつて
 とを悉くあたらうあきらめをせむといひ
 うらうゆ目さむの心ちううことゆを懐か
 きえまらふとくさくさゆんまめゆさやうひ
 さめてさへあつてさゆもさやうてよみん
 お利きまか書あそあある

くらき夜のまらゆはとん心つきおとろさうすたろき
 とがらのえみう言ゆたうらあゆもまひけるか

大進物

かねのおとをうまやしくと大垣のふちをまり射司
 縄きとみ弱きあてうの中お検見のさまこそとよえ
 けおけといとゆゆと射司縄さたああてもうて
 まのうすはあまやふまゆなりいまをよひつきこの
 しろのきの白毛の大ねとろききまりしくもゆも
 けおとけいゆも梓うかしくてをまもひつむ
 縄きとゆゆつうちうて射司をたす社をくらけ
 園やうとあやうはさむさすてもらあさくやとさ
 いてう

夫だ
 文字詳
 夫淑の訛
 言々半の
 下界の
 竹見の今
 けまみ
 志とつ

春うぶのゆつとらき世のさまがなやまの氷うぶのつらぬ
たらのやまあつとせ雀とんまきといつしやまきトねららと
ちりかくの梅をもしすてこま人のさくわらさるるなと
ちかよつらひさるもらやまおつまんとやうせんのまじら
はくすとせ人のいそく 時をとなまゆあまつ方こそやせらと

秋述懐

つつましとらふこころとていゆのむき世のまじりつらぬのまじら
志ぬまじり人よきまきとありむとらやまきまはあこのまじら
夢を述懐

こもすれも又とらふかほ一ま推たてきとせらうき世の
はとともせまきしらをい偽もあれと人のいとひめす

寄昌浦述懐

よねくおむらうらりの昌浦く明日のうきあつらとてや
とね中の人ららのあさちあやかけしとまあのねさけとらと

寄月述懐

あふれらつて月のいゆくおねらるるひとらまけの月こ
月影をいつとみえとらひ人のねらうらやととまての山

むらうやてうきやん けうぬめやうのこをあと月ふれい鳥かう後ん

寄書述懐

書よむしむりき物の在おすゆわつなひきさくさうわつあこ

老の石述懐

小石ほらけにかとつるうあわらうもたはれおもひろりれいせす

老の獣述懐

かろろや狐狸をけうんん人きむとをけうるおりさき

老の魚述懐

かろとくは解おんうはてはろくすは曲まを針おかすきあさか

老後述懐

よろちひをんおもとむる世中おぬらよめおらそ福老とを
思ひおるけうのことくはあええのやきかきて方の音うね
音えんををたまふあからまきぬらひりやむむ思ふとあ
ろろりよあさあすんぬ引ひて弥陀ねむをあゆらうあ
むうとて時あもけうぬ思山むまをひらくかこさひふらり
我をくはまればまたの年かりてこをわいまよりす急の世乃さうは
はうある時あこ
よの中おかしきせんんつこひあこ人の人めきもさうい

時およぶらんかゝるもあらかし人さるり口はての衣さ
夜ふらうら移らんしを

若かりし身のいゆしふゆぬのの移るの後乃ん移りしり
すみたはらわたりゆむらうすみは人のあそ
とらん

移るはことまわしし人の後ささいづすむせと物ゆるる
移りしりさつしるんせよ人のりしり

カ明き桂の移をいづてこそるんはかきし人ゆんすき
らんあさめとせゆらんきことりりあまを

やしあふとをうとらんといつしきやふのさしよとの氏よ

大御所からんせたまひふける春上野のさくはるの
咲けんとらん

世の中はねえともさうそ移るはうらぬさゆゆあふはこあ
よの中乃まを春ととさえぬをさあはれとて笑ありし

か夏千は後方まうつとある時春海りもとよ
八みまうとあひしうけて楳の陰あむ人やささまららん
あまのしとき

菊もみらも向むとのとあひまや君を時あふのふらん

大冢清義方傳つりぬときてそのいそぎなる浅香

直光のいそぎ

清もいそぎ終ふりしき道なれと先づつ人をまのつらみなる

一 京の久我を理右衛門母方まゝりぬと貴川利義

りゆとより昔おこせひれをいそぎにつけく

かひくまといふも程やかけくらんかひくまぬ方もなげくは

文化七年の秋小松長文り方まゝつとふる時

おらまゝめてうき世をわのまゝあなつはあまのいそぎをいそぎ

いそぎや親おわらぬし後も又かゝる親おわらぬいそぎ

いそぎるちをむ有ともいそぎまむあまのいそぎあひま

月えつ付ふりていそぎもむあまのいそぎあひま

あひまもいそぎあひまのいそぎあひまのいそぎあひま

妹とよも親もあまのいそぎあひまのいそぎあひま

よも林のすさひあひまのいそぎあひまのいそぎあひま

らもあまのいそぎあひまのいそぎあひまのいそぎあひま

人のいそぎあひまのいそぎあひまのいそぎあひま

た乃とととあひまやあまのいそぎあひまのいそぎあひま

あまのいそぎあひまのいそぎあひまのいそぎあひま

しゆしこやてんはともちぬ者まうらねとね梅は花さきおくり
女の墓おさしとて 檜の枝ふきのむらりか
けしをえん

今こそおあきこのむらの秋風おちよといとんあうもあええ
おあしとあて

まの系つらきそつきんとあきゆつるのゆやまひかきりむ
白藤秋本世り病していとねりけあめぬときて

とろかしてかこみよとろくた書の今のあてあくたつむとすらむ
お井量体お母お三十回あふ



つゆしのこといりあうんあしゆもくききせんかあしりり

本系惟則お父お三十三回あふ冬懐旧と

あつらよのこおあ志のふねあとりやとあおあふかあせさうらん

清女信はる過ぎあ書月懐旧と

あうあつて思のああし法ともあえし人いつああ月うけ

寄月懐旧

月おしゆあかちちうせすの行とと昔と忘のああとらさああむ
人忘のああけきや月おさとらうん枯も氣のさやうかうぬら
廿んうとあてうせあう人の過ぎあ秋懐旧と

枝よるこそめとそそくもみち禁の正や一人を忘のめけり
久見因幡守正典之は北方の方まうとふらる時
こり美と無事とつふことと人々こととふ
ふれといふらるあうけいひそくおせら美やおもひしめ
内後西美うまわうらう方まうりみる時言
無事とつふことと紙
とふらるととと一かぢふ消たつる君うす巻のそち社す
七月魂祭すね
又一人のあまきりあぢきとと年ととおかぢくそくととまうりうらうら

行うは八十乃聖の辰風ふ機のみさけらるら
つひーらぬとふもつらうとらうとまを思ひのくおそひほ
あまーくのわらうお甲の心
川そひのうぢふさきぬわらき寸ちひさなくせよとせららめ
つら人の智ふむ月の未夜と
よとゆふかぢらぬわらうりゆくまあそおのこまふ有けん
祝言
君う代いくせとさくふ土の風にうけてちまうすはまうて
石川右近将監忠房主の母乃八十八の賀うり

寄贈祝

おとしやまの乃しも思ふ境君のつらふふきと鳴り
言指政久う六十の賀子歡甚不限年とつとを
いそよもふをやそなたのみといふ事こそかゝるぬとよ
文政七年の春薩摩三位入道殿の九十の賀
せよ安んずいふ不徳よみそ奉れと仰ぐれと
君の存心は年の暮をともすけしとね乃と母と何おひひん
みま人の千尋もといのるかぬくとつめてつらうひを三
つら人の賀ふ寄竹後と

風そよく新徳の竹とお乃つよふ君中とつとやおあひくを

つら人の賀ふ

ら竹のよけやう人乃しもやいとお先君をこそせひえかり

つら道祝

井代よりやっ日本ふとそふぬ送るせよと後しとそおもふ

幸途を平代

かふきよひけたたけとおもふつきさうのあやみとつゆのあ

は内ふを浦村をわつらつ祖よりそあふ

あてそこの名を中村は居あつとそつといひ

元和のけりちのま

大御所大坂の仇くらたまふらんとして千万の兵を率ひま
て後河の風より打たせりし時四月半よりけふ
志のひふんしきして五月むらじ日四つちのめは道
のちあへせきまうひて茶臼山みぬく世まひぬと
そまけがりの事ともいふの記みらんしこれい
あんとらいつきそ屋とせましきし一か今
つりて門よちきぬけし一もふとてこれそのか
馬繫みぬく本なりとて心弱繫ねとそつりぬ

の甲うち唐つうおんちや後後のせはあつて五世も
とて大寺の経巻をよとて取らつてふと
さあけととて進石もあつては本はなり
くもてぬかの書あし後とあひともくかこれ
いまむつとつらきうたのあまふふこころよみ
碑はあつつけさぬそのまのい佛足石も
くもてあつてひてもの

美伊久佐子阿止毛比麻志豆夜等羅志志己乃阿止
止己呂多布刀久毛阿留可 加志己久毛阿留可

佐須多祁乃岐美賀乃羅志志多都乃己麻都奈岐志
麻都波伊麻乃己乃麻都 衣太毛志美美尔
加布知乃夜止與羅乃牟羅尔多互互於久己乃伊志
夫美波乃知乃與乃多米 加多利都具多米

郭 二

まきさつて夏さうらねとつーかとうみふねてゆもさやあ
るえつてちみしゆるあけこすおもゆつことうきさひゆあしと
谷信おのちるとらも行家おぬくきとてる人のちとと
とまうけきん人の耳あといつ信郭公のまやまゆとつさ
よひおんどまらとらうおも又らるあうけけねるおもとく
まのちややこのほむまきおそく村雨もしゆより嬉しく
あしゆあふとら起いて本のもふまもとわうつ夕まの枕も
らうて床のうしお耳をもとらうをけくゆこれらうとふおと

加美波乃知乃與乃多米

波夜夫苗加微乃乃羅志志多都乃己麻都奈岐志

麻都波伊麻乃己乃麻都

衣太毛志美美尔

加布知乃夜止與羅乃牟羅尔多豆於久己乃伊志

夫美波乃知乃與乃多米

加多利都具多米

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

郭 2

まろそて夏さうらねとつーかこさみふれてゆもさやあ
るえつちみしゆるさあけこすおもぬつこさひゆまよと
谷信おのちささくも行家おぬくまさとる人のちよと
こまろけきん人の耳あといつ郭公のまやまゆとつさ
よひおんどまらちとらふも又ろろあうけけねるをそとく
まろのちややこのほもままおそく村雨もよより嬉しく
つーしゆあふとら起いて本のもよまもとわりの夕まの枕も
とろて床のうしお耳をともつをけんゆこれとらうとあかえ

ましとけふまてととはのうねる事も言えぬあれさへも
うらやましやとてしや思へやとおもひも捨すらひ志のひ程
くちくと云つてさうありとれなきのたふひきわさる
まじのなみたつまつのこそ思ふようはひうちとあきふやこりお
一ぢやあきまて今もすまひ

四月とて久見周幡守正典主のまふ大春

あて乃ちらうお

うらなひく春れをそとけまつるう月一うとらうら日さ
まやこのまも思ふまふ大春とてとらうのこりぬ

いまぬまあくのつとよつねまふらなひよそひして
うまやらふあうらえとてけ人もあひえみあひえ思れも
あらふおつる一とれとてまふはれまふ山ゆけとさう一
らとけけぬみ田けとあうこ一とけけぬまふまき道のちあ
てとけけぬみ田けとあうこ一とけけぬまふまき道のちあ
まねつとけけぬみ田けとあうこ一とけけぬまふまき道のちあ
まねつとけけぬみ田けとあうこ一とけけぬまふまき道のちあ
まねつとけけぬみ田けとあうこ一とけけぬまふまき道のちあ
まねつとけけぬみ田けとあうこ一とけけぬまふまき道のちあ

及 致

父母と人々とのむねをなれとてたてこのしむねかけあむ

橋 夜

夕暮れを沖へいづり明らきと田のこゝろあつるるすうも
枯れしあはれをおのりすむき母とひまはけくわわらり
すめきとつさよひみ友とくわいてとくもみすいあ
よのそらうきかみあひやしまし吾世のうあははるると
つらしちけさわきはういふ東あはるるとかきそてあつもの
まてしよりなやらの口へもあうはるるとしと福あははて
うあつわらひなけまつつらむのきとるあうりかふあうら

さうおういふはえそかつんめあはれとまきなうし夜ふ
るきととさなみつひにわいつとあはるし橋夜つらきとを
あまこかきとらうらうしやけいもせすてぬも玉のようし
あまきとつらつらきいひいひをまけあやらむあやわら
らむつみぬく君しあまもくとわらうてまきまうしそのと
つらあはれし門ふあうら夕あを園かきとらひいつらうとまら
ちあまもあなぬあむいあやらまははるるあまやうかつ
わらせらとさむとあまもとまきあはれとあけとあうら
かけしあはれえす玉つとのつらひしあまはあたととをいつの

なうまんとらきとつすも

富士山

よとねみそちきさうひおふとら國をたれと山といふ山は
たれと日本のおよけきぬをみらちあきふめーあきと
むうよまかーさきんの勢ふよと文おつらうてさゆく
たくへまつらひあふこと今たつたんぬきの中ーお
そひえそやまーしふーもさるとつれとちまうあそあまの
ーこやそいつとく仰くとらそ天地のちんたかきりおふと
つふもたれとも山とつふ山をたれともやまをさの山

及 教

石二のおと、神のつちまゝの君の山まゝとらきー美代までお

大黒天

むーしやまきまこよう主人のいふとひまつふ日のとね
ふーのおあまのつちー神まをまうーはれそつ中おはし神に
とらくの太ちゆつふたかつそのさつけあまといかへ
まぬもてくるかふうをさゆめうまひ太のまおまこと
ここぬとらつとつちとらとらーは思ひうまうさーおを
そつつ福ふみきくゆーたーうきの申乃あまをよとら

常おあすしてやあーつふきつるまはをこつふの母乃
よ日の本むういものつくあは梅のむゆのむらさき
よりいこもさすあてこらうふいつきまつまむ人毎こ
ちとひまはてあこの沖の神あきすこ言なきー
を想うつろひつみうらあえーとおきて秋うらひさ
こつきあてあつたつうあつるあーと麻ーとのひさ
ちうふさあやあーりのしやうをうらうらよめすか
いとひさうこ八百あ千代まてあのうらあちのうらうを
こらうらーいやささそえんことほきまつふ

追加

池邊柳

春柳の風お甲らまを移ろふを他のさみよはかそをん

春雨

はるさあのか雨あけふむらー晝もう海いのきまかーまけ

名所春曙

山塚のといにうら川のむねあおとおもとーはるのちけの

落梅香

よーや風あうせちうめ程あけかほら梅のかさうまーやと

○ 秋城言ま追加

河上春月

月夜をしのぎて春の紙を川をみよすく水の月かけ
名所春月

なみくとかすむ光の白海弓いささきむさし原

閑庭 堇

いつーうやすみとさきみまのさか梅ちりかる垣のうらみ
ことさうにうゑをかう種と小紫甲あさき種の堇とあはれより

山 花

みよけ山をさううのたりみらうまゑの懸雨とる花のおきみ

遠望山花

さく咲く春の花ふつゆれてちけわのさうくかきむさし山

花下日暮

くらぬやもつ花あわらう、山寺の傍やさううのきぬくのさ

暮春落花

嵐ぬくれたこのまをまの松山ちん花のおきつーしゆみ

ゆさうふまらうとあて梅の花んさうか

そつまハ雪ぬとわさし帰るなむ花のこらうハわりあふんて

暮春人事

夜二らうのきぬをそひみあらうとあひいそく局まらうね

樹陰細涼

けろ原てる目をそそく陰かれはけおこのもそけすしーかうける

草庵虫

さよあけしむのききうとねまふいあひさひーあさちふの宿

紅葉勝花

きみち葉といま時なれやたらねふとくそねのこふふふーそ

あは波のふつとねもみちまそめそ極もろそとらうききか

八月十五夜月をえて

あめとちけふんる月の心と又きのめやいいてきーかうま

秋山

らうらうきいーかうけい入るの日はけふあつむねのききやま

残菊

おとあふやつしんをつしきくね花うれふのうなふにあめたれと

うつろもなやうつろふとみえぬけうまふまうるをのー菊

水邊寒月

あまきむの月れ光や社の夜いあまひらうきー川へあつらうあ

閑居冬月

さよぬらるまゝ、小光をさえまゝさるゝあともき危乃雪ふてゝ月

くはまふ

まろしきやどむとの中、小舟をかけるのさうもまきの夕られ

春恋

うらけを雪まのまねもみぬをわろそ入つことやすたる

夏恋

うつきみのとや海の杜れを後をとりこころをまをさるゝあはれ

中、おひとうあるよういと女のらひくんとらふらるゝを

ゆんふたよあめをかくこのほろきとくゝえあひまをさやあらん

あひくまき女のりよつひをくゝとつあを

二よとあひていんくひまをそ一世ふ一後あひみまゝくゝ

朝眺望

おちけをいへ行くおやとあふやも日一途かあ

幽居待人

君あま世芋粥をそとくゝあんふとひたる君もえんてら

深山遊

さよふらるほお若あそひきくらんくゝより奥の山は遊川あ

入江ありありほお月のうつたること

○秋恋集追か

○四

海を居るあしまのいそや捕らむむよるともみんは波ふける月
と東清人の将事とる或書をとて

武士をつゆよあねつるふあうのちとらやまにあかもあうはや
志とけなれたらうまひねまやわうふの人あはれもかくハ私人

仁桐宗振う茶匙の旨小飲とるあやせきけり
村へこれ降日いれれもわひきり小猿事てなく冬山さや

箕田宗範う山かうのもよりうさまかけ繪
聲あうとつひくれと

春の中よつちれきすら己う所あわとあれいこそを結ふいさうや

菊池容齋うかき火輪船のかゆお加後行虎
歌えけれと

弓矢とるわの國あうとおも人じやうき舟かや波の上

膝のころかきう弦お

うやまーた方とかへうたをやめあふもさうくねれる膝お

そのあをを忍ふをむさまのあううー同一虫ととええぬ膝お

正月のかさう酒老をきあおてつやうに當れ床屋

うたかた紙繪お吉見吾往う言えくれと

春しゆむこといつそと雪のさひくやあつる海のおきねお

年々後進するに及ぶわの友窪田勝英も武藝
を不世え言ければはくの業習ゆけりもいと
多うとやう一之保十四年の冬炮術 御覽せむ
とせさうらふ人の中より上手とも十人えりし出
させて居まふやうに其のまをせたまひける
勝英よといひ八十又てその子清者とやとふけ
りえりしひふ加へられてはきぬる所作つうまつ
けりいとつらうふおもたう一きけいふうけり
おのりらんとして其の由をたひめりはつてふ

うちある筒のひきまを何れから一わと年とふ言えり
は一人の家おのみ傳へてまゐる撲秘といふその
つらうかひふ傳授しつうけんと
骨のみといはげと何れとらんく此たちかろをぬのまひりぬる
防海のためおとそ有司おあをを東海のおとらふ
巨炮其まゝくつらうけらるるときして
仇まといはるるをぬつてぬつ浦野のみねと浪とならば
明嘉靖中小佛即機を始てはくして大將軍と号すぬ
まよりのち大煩あまつらうてあやしく其大將軍
とよふおと加へこの書ともお見ゆをを譯して此二句
をよめるなり

若泉法水うすめさうしとみの中里の水ぬれこた
らしきつらぬきた鴨のけやあやつらもの
必あつてふとえ付くらんあんとをえさき
よとつらぬおきさういまよりいみとをさうり
さきあやつらぬむ月日ふるまふあきさうさ
まらまを忘れしりしをあつらえおつらや
蛙のかれさうさぬの枝おつらぬれさうさ
おあせしりいさうさしりさうさしりさ
垣根ぬる鴨のさやあはゆるより契りしと
い忘れさうさよ

か藤子藤子あまつらふさうさ村田春海
りさよりさうさあつらぬさうささうさ
むらがる星さ有らつらぬさうささうさ
君さの斧をのみささたのむなれ星のさや
あつらぬさうささうささうささうさ
柳亭種彦のさうささうささうささうさ
あまつらぬ後さ妻の勝さうささうさ
夫のさうさ愛さうさ元禄の比さうさ
若衆人形さうさあつらぬさうささうさ
返さうさつらぬさうさ袖書さ

よふすゑも涙のこぼれをみしりてたゞるを
小松園のつらきぬふと紙うかたるお松の
こは本まいつきあてし書てよと乞うふこの
つらきおとひうけたる女を家おを急をやくとふ
すじろふありたれも本言うれその、お松をいそ
きとよみてこのすゑかきつけをうりつがう歌の
すいたうり書さるゝ何ゆゑあつと笑おはうん
けれと此頃あゝ人のとやあてし調う本をうけふ
何りの卿は未だよみつきくまへるをえうりま

今はきまふおらひてそのまをいりめつらうから
さうむとてまつらう一十種中將の法とやふ
おえたる強城おらまをよさうの本あてしおあて
もよみてんとのまうらうおようおんといおあ
せぬ後おあをよみ編らまをいらるをえん
有切卿
ひあ松をつみやたるこふ生のあれ
歌城
校ふこもたるたつとまむむるく

成院密文の都より一へりて 千種中將との
よりとて文がせしむるをさうて名はと小林え雄
ゆいハ致の心をえてよつ世のすあななるこやひ
かなるすちをよくよみおしれも其名たうう
えたれといまとないせぬをたうぬこふれこひ
わらうつるをこゝい密文大徳のゆくうなく問
あそそはよめる致のこゝいたつくこやひとる心
さしゆてつらにかうけるをまらふやうこ
まはあさうたひもゆるむちちしていこよう

ろろいけとまかのれう致一つかうてよかあ
ようとてふしとてむとととあのをのうけれ
さういぬもて玉ふうむとをぬむ 武能根ふ心
たうもふと風の声ふひうのあうとをきき
みう一世のたのむれ居のまつれを今よりた
まつ月と花とふとささるさういふ一せむと
古たみをもす傍らとぬむきうううそまふきあえたうけむ
りねふとゆといふのまはあみいとよくもる守月と花とを
うかふみけれとなうきあさうふさうううかふきうえ

まづからせむも中々ありのそとないやとて
肉の志はあろうそとぬ布なとらうせは
てたかこまりおとやせてやまぬ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

歌城

姓藤原名元稚字子駿歌城

其號別號髭岳堂曰雪衣通

名小林田兵衛

將軍家旗下世臣

門人

朝比奈真春

青木弘道

瀨名貞固

淺香直光

富永守緒

森川利義

寺山吾鬢

力石重遠

内藤忠周

加藤行虎

小林元梅

將軍家勲不世臣

次小林田共衛

嘉永五年春二月

松嶽系以山縣宅

孫

男

410
221

賣弘所

江戸芝神明前

岡田屋嘉七

大坂北久太郎四丁目

河内屋新二郎

○ 秋田書集

